

ランチタイムミーティング参加記

登壇者： 寺尾美保先生

1月7日、12:30より文学部人文研究センターで2026年初のランチタイムミーティングが開催され、そこへ私も参加させていただいた。今回、お話をしてくださったのは、文学部史学科の特任准教授であられる寺尾美保先生である。今回のランチタイムミーティングでは、「大名は華族になった」というタイトルで、薩摩藩藩主であった島津家がどのようにして「華族」になったのか、をお話ししてくださった。

教科書や学校では「華族令により、大名は華族になりました」というような説明がなされるが、大名が華族になるということはこのような1行の短文で表されるほど簡単なことではなかった。約700年に渡り地域と結びついていた大名島津家が華族になるということは特に簡単なことではなく、廃藩置県後も、薩摩藩と鹿児島県がはっきり別れているわけではなかったと。明治17年に華族令が制定されるが、華族令の制定後も上京することはなかったという。しかし、西南戦争後になると、さまざまな圧力もかかり、10年ほど遅れてやっと島津忠義が上京した。忠義は鎌倉以来の犬追物という武芸を試みたり、琉球の音楽を披露したりするなど、独自のやり方で華族社会に馴染んでいき、鹿児島を訪問したニコライ2世も忠義のおもてなしを気に入ったという。さらに、華族時代の邸宅についても貴重な史料画像などを見せていただきながら、お話をしてくださった。鹿児島にある磯邸(仙巖園)は、華族時代に主に使われていた邸宅だったという。また、東京の拠点として、袖ヶ崎邸も紹介していただいた。大正六年に披露された袖ヶ崎邸には島津家の家紋である丸に十字紋が記されていた。「大名が華族になるということはかなり困難なことも多かった」と寺尾先生は最後におっしゃられていた。

寺尾先生のお話の後にはさまざまな質疑応答がなされ、終始楽しい雰囲気の中で今回のランチタイムミーティングも幕を閉じた。

私は鹿児島の出身なので、「島津家」についてすごく親しみを持ちながらお話を伺っていた。今度また地元へ帰省するので、今回寺尾先生がおっしゃっていた仙巖園にも足を運んでみたいと思う。大名が華族になるということは今までさらっと語られてきがちだったが、実は困難なことも多く、とても時間がかかった事業であったということを今回のランチタイムミーティングで知ることができた。当時の大名たちも華族社会で馴染むためにさまざま努力を重ねていたことが伺えた。

角倉 暖野(文学部文学科 日本文学専修1年)